

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, June 30th, 1956. No. 292.

關西大學學報

昭和31年6月 第292号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十一年六月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第二九二号



文化祭のポスター

關西大學學報局

THE EXECUTIVE PROGRAM

—— 経営者教育についての一断想 ——

澤 村 榮 治

今日の経済・社会機構においては経営者が槓杆的地位を占め、あらゆる側面からの圧力はひとえに彼の双肩にかかっている、ということは周知のところである。企業が私企業であろうと公企業であろうと、あるいは製造企業、銀行、商社、公益事業等、その種類がいかなるものであろうとも、経営者が企業における中心的な、そしてかつとも動態的な存在であることはいうまでもない。彼が有効にその職務を遂行するには、彼が嘗て学んだ知識、それにもとづく創意工夫は勿論、その経験を通ずる蓄積さえも、現在の複雑多岐な、そして激変する現実に対処するにおいては、あるいは力弱いものでしかないであろう。将来の有能な経営者の養成が今日の重要課題であるばかりでなく、現在の経営者の地位にある人びとの教育も、亦加えて重要なものであることには、経営者の社会的責任が重大化する現在においては、大学がつよく関心をもち、積極的にその場を提供する用意をもたねばならないであろう。しかもわれわれの大学は、わが国における商工の中心都市に位置し、商・経・法・文の四学部によつて構成され、国公立の如き拘束の少い、すなわちいかなる事態にも自由に対応出来る性格を本来的にもつていのである。されば前時代的な観念をふりすて、いち早く積極的な教育政策がこの方面にも打たてられ、わが大

学がその意味での商工都市の中心的位置につかんことを願うのは、ひとりわたくしのみではあるまい。わが大学をめぐつていただく数多いわたくしの夢のひとつの実現を念じて、アメリカにおける経営者教育の様相の一断面を、ここに大方に供し、参考に資したいと思う。

シカゴ、ピッツバグ、カフネギイ等の諸大学における実態を中心とするに、まずその設置の趣旨は、一般経営体の *senior management positions* にある有能な人材を対象とし、その人びとの多種多様の経験や履歴が当面し来る諸問題やいろんなケースを、いわゆる経営者たるものの考え方 (*thinking in company-wide terms*) で処理しようとする、学問的・実務的知識を供給することが目的とされ、

- (a) 経済学、会計学や統計学を実務経営に利用する方法
- (b) 実務問題を一般経営の見地からいかに処理するか
- (c) 会社における管理者の責務
- (d) 現代の社会的、経済的及び政治的諸制度内における実業界の指導者たちの責任感

などを教育・養成することが主眼となつてゐる。次に入学に関しては、その資格は

1、大学卒業者

2、十年又は十五年の実務経験者にして四〇—四五

才 (カフネギイ) 位

とされるが、後者の場合勿論志願者の会社における成績とか管理手腕の方が年齢より重視されることは当然であろう。而して入学は個人の志願書と面接とによるが、その場合シカゴでは次の三点が判定基準となつてゐる。すなわち

- (イ) 大学院程度の経営学を学びうるや否や
- (ロ) その管理的経験より当プログラムに貢献するや否や

(ハ) 経営管理に重要な影響を与えうるや否やの三点である。

第三に定員と授業料であるが、定員はシカゴにおいては七五名、カフネギイでは三〇名、ピッツバグでは七三名であるが、本来講義方式よりもゼミナール方式が妥当な教育であるがため、シカゴでは一グルッパ三〇名を単位として構成されるのが適当であるとの意見が附せられているのは当然のことでもあろう。また授業料については、シカゴでは一コース一〇〇ドル、二ケ年フル・コース一・二〇〇ドル、カフネギイでは九週間プログラム (図書及びテキスト代をふくみ) で九五〇ドル等であるが、わが国における場合は一般の授業料、すなわち学部及び大学院のそれと対比せしめ、それとアメリカにおける対比との比較を通じて決定の考慮がなさるべきことはいうまでもない。

第四に授業日数ならびに時期であるが、これらについては種々であり、カフネギイ九週間、ピッツバグ八週間、コオスを年二回、シカゴ二年コオス等である。ただしシカゴではEvening Courseであり、このため特別の講座以外は普通課程の授業をつけることになっている点は特異である。

第五に授業方法 (Teaching method) については多種多様といえるが、要するところは実際の business cases についての討論が主であり、いわゆるCase method であるが、それ以外は講義と討論との混用である。シカゴの場合は受講者の便をはかり、その余暇の時間にも有効に利用するために、各コオス共一週間に一度夜間に行われ、その場所も大学ではなくしてビジネス・センタにある有名なビルディングにおいてであり、時間は六時一五分より九時三〇分 (中間に半時間休憩) とされている。またカフネギイでは正規の授業の他に The Informal Program と称して会食 (dinner) を行い、全員相互の情報交換に資していることは注目に値する。

第六に授業内容を列挙するならば、まずカフネギイでは

Business Policy.
Human and Labor Relations.
Financial and Other Quantitative Controls.
Business in the American Economy.
Statistical Thinking Applied to Business Problems.

などであり、シカゴでは

Managerial Accounting.
Administrative Relationships.
Business Economics.
Industry and the Individual.
Statistics for Management.
Industrial Relations.
Money and the Financial Markets.
Financial Management.
Public Relations of Business.
Business Organization and Policy. などである。

以上がアメリカにおける The Executive Program の概要であるが、上述した如くその資料は Univ. of Chicago, Carnegie Institute of Technology, Univ. of Pittsburg などの School of Business (or Industrial) Administration などにおいて行われているそれからえられたものである。このプログラムが実施されたのはきわめて最近のことで、経営学分野における目覚ましい発展によつて促進せられたのである。上記三大学についてみるも、いずれもその所在は商工都市であり、その地理的条件はこのプログラムを実施するにおいて絶対的条件たることはすでにあきらかである。而していまかかるプログラムを実施する大学の側よりいえば、これを通じて大学は一般企業と (あらゆる意味において) 有利なコネクションをもちうるであろう。すなわちおそらくそれは学生の就職の問題等から、大学の P・R 運動やさらに Cooperate Giving の機会を獲得する可能性とその増大等にまで資するであろう。さて最後に、もしわが大学においてかかるプログラムが実施されるならば、……という仮定のもとに、そ

の第一段階の実施方法を付け加えよう。すなわちわたくしは、ある財団に働きかけ、そのスポンサーで The Executive Program の American Seminar をここ大阪の地で行うよう、而してその財団を通じて招聘出来たアメリカの学者・実業家を一応の中心として展開するよう、計画せられることがよりよき方法であろうとおもう。なおまた、ピッツバグ大学がピッツバグ商業会議所と共同主催にしている点などをも考慮すべきであらう。しかしわが国の産業の実態より考えて、右の方法はいうまでもなく大企業向きのコオスについてである。わたくしは本来、わが大学においては大企業向きのみならず中小企業向きも必要であり、その二本建を構想するものである。従つてあげてまず上述の方向のみを主張するものではなく、出来得れば両方の並行的実施を考えるものであるが、いまの場合まず notoriety への一歩という点と、(中) 小企業経営者の実利的関心の強さ、すなわち学問的関心の強さ如何という点等より、右の如き方法の一端をかけたにすぎない。他日詳論が許されるならば、その具体的方策の立案を試みたいとおもう。いなむしろこのような論議を超えて、わたくしのもつ数多い夢のひとつが、このわたくしのふるさとである大阪の地を舞台として、わが大学によつて実現される日が意外に近かつたというよろこびをいただける日をわたくしはこの梅雨空に太陽にあこがれ、その光にたわむれる日をひたすらまちのぞむ子供のように、ただひとえにまちのぞむものなのである。

(教授・経済学部)

(昭和三十一年五月二十六日定例評議員会における発意見要旨)

J・S・ミルと日本

——生誕百五十年に際して——

杉原 四郎

アダム・スミスの『国富論』（一七七六年）の中にもすでに日本に関する数ヶ所の言及が見られる。いわんやイギリス古典学派の殿將たるJ・S・ミルの時代は、その始祖スミスの時代から一世紀近くも現代に近いのだから、その上ミル自身が三十年以上も東印度商會に職をもち、東洋にはふかい関心をもっていたのだから、ミルの著作の中に日本に関する記述があつても当然である。事実たとえば『経済学原理』（一八四八年・嘉永元年）には、生活が習慣(habit)に支配される典型的な国として日本が中国とともにあげられているし『オーギュスト・コントと実証主義』（一八六五年・慶応元年）には、現存する聖職者の元首の例として、日本のミカドが、チベットのラマ教主とともにあげられている⁽²⁾。そしてこれらの敘述を『国富論』での言及が主として日本の金・銀・銅に関するものであるのにくらべると、わが国の社会的特性に「そう立ちいつてふれたものということもできよう。だが、ミルにおいても、日本への言及は、中国などとならべてこのついでになされているにすぎず、この点はスミスの場合とかわりはない⁽³⁾。たとえば生麦事件（一八六二年・文久二年）がしめしているように、アメリカやフランスや

との対抗上日本においても支配的勢力をうえつるべく当時のイギリス外交が日本にかなり力を入れていたことを考え、又その頃ミルが政界に積極的にはたらかけ、とくに六五―八年の間はみずから下院議員として多角的な活躍していたことを思い合せると、すくなくとも晩年のミルにとつて、たしかに日本はスミスにとつてよりもはるかに身近かな存在と感じられていたにちがいない⁽⁴⁾。だがそれにしても、ミルにおける日本は、印度や中国とくらべると、やはりずつと影のうすい存在だったこともまた事実であろう。ミルの主著における日本論を、マルクスの『資本論』第一卷（一八六七年・明治元年）におけるそれとくらべてみると、同じく附随的な言及にすぎないとしても、後者の方がまだすこしは実があるように思われる。そこで本稿の敘述も、おのずから、その重点を、ミルにおける日本ではなく、日本におけるミル、より具体的にいいうなら、明治維新以後の近代日本におよぼしたミルの思想の影響——それも紙数の関係上主として昭和の初頭までの瞥見——におくことになる。

註(1) J.S. Mill, *Principles of Political Economy*, Ashley's edition, p. 105n. 末永詠(一)二二頁。だがこの箇所は第四版（一八五七年）以後削除された。
(2) J. S. Mill, *Auguste Comte and Positivism*, 3rd ed., 1882, p. 110
(3) 本庄榮治郎「アダム・スミスと日本」(同氏『近世の経済思想』所収) 参照
(4) それどころか、ミルが、アメリカの内乱に際

して、イギリスの世論に抗議して敢然と北軍を支持し、その為の論陣をはつた(『ミル自伝』岩波文庫三一〇―五頁参照)ことは、客観的には近代日本の運命の決定につながる意味をもっていたといえなくもない。というの、もし北軍が南軍にまけ、アメリカが南部のヨリ反動的なブルジョアジーの支配下におかれていたとしたら、そのアメリカとそれを後援していたイギリスとフランスとの三國間に容易に帝國主義的連合が成立し、その圧力によつて、日本も中国の場合と同様植民地化のコースをたどつていたかもしれないからである(服部之總『近代日本のなりたち』一二四頁参照)。それはともかく、十九世紀の後半以後において、世界は、資本主義的世界市場として、實質的に東海の孤島をもふくめた一体となつていたことを注意すべきである。
(5) 木村毅「マルクスと日本」(同氏『文明開化』)参照。

二

ミルの思想は、まず、幕末から明治にかけて欧米に留学し、現地で直接間接に彼の思想に接した人々——彼等の多くは、帰朝後明六社の同人として啓蒙運動に活動した——によつて、わが国につたえられた。つきにかかげるように、ミルのおもな著作の多くが主として彼らの努力により明治十年ごろまでにすでに訳出されていることは注目にあたいます。

○中村敬太郎訳『自由之理』 明治五年
On Liberty, 1859

○永峯 秀樹訳『代議政体』 明治八年
Considerations of Representative Government, 1868

○林 董訳『弥児経済論』⁽¹⁾ 明治八年
Principles of Political Economy, 1848

○西 周訳『利 学』 明治十年

Utilitarianism, 1863

○小幡篤次郎訳『宗教三論』⁽²⁾ 明治十一年

Three Essays on Religion, 1874

○深間 内基訳『男女同権論』 明治十一年

The Subjection of Women, 1869

これにややおくれてルン
ーとスペンサーの思想が紹
介されるが、自由民権運動
のたかまりとともに個人の
幸福のために社会を改革し
てゆこうとする現実的なミ
ルの功利主義よりも、天賦
の人権を真向からふりかざ
す理想主義的なルソー・ス
ペンサーの思想の方が急進
的な人々によつて熱心にう
け入れられた。そして改進黨
がミル、自由党右派がス
ペンサー、同左派がルソー
というのが、民権運動の最
盛期における思想的支柱で
あったといわれている。こ
のようなむすびつきは、フ
ランス革命に直結するルソ
ーの民主主義と、諸制度の改革を通じてフランス革命
をいわばなくずしにやろうとしたベンサムを思想を
本質的には継承するミルの自由主義とのちがいがら
る当然の結果であるとも見られよう。しかしこのよう
に類型化して考える場合には、ミルの思想の影響力を
過少に評価しないようにするために、つぎの二点が考

慮されなくてはなるまい。第一に、ミルの思想は、当
時わが国に輸入された多くの欧米の啓蒙思想家乃至社
会科学者の中では、もつとも早く、又もつとも網羅的
に紹介されたものだから、その影響力は、決して一党
一派にかぎられたものではなく、彼の諸著書は、その読
者たる当時の指導者達に対しては直接に、彼等の解説



~~~~~  
ロンドン、ス  
クール、オブ・  
エコノミックス  
の近くヴィクト  
リア、エンパ  
ーメント公園の  
中にあるミルの  
銅像。三月とも  
なれば、この銅  
像の下には美し  
いクロッカスの  
の花が咲きみだ  
れる。ちなみに  
ミルとテイラー  
夫人の蔵書は、  
現在このロンド  
ン・スクール・  
オブ・エコノミ  
ックスに蔵せら  
れている。  
~~~~~  
高木教授撮影

と行動とを見聞した一般の人々に対しては間接に、近
代的な自由と平等にめざめる契機として、広汎な影響
をおよぼしたことを思われる。かの福島事件の中心人
物たる河野盤州が馬上中村敬字の訳した『自由之理』を
よんで大悟したという有名な挿話はその顕著な一例に
すぎないであらう。⁽³⁾ 第二に、ミルの自由主義自身が、

ルソーにくらべてはもとよりのこと、ベンサムに比し
てさえ、批判的なところがあるがうすれてきており、なれ
ばこそその思想が明六社の官僚的イデオログ達や、
最も温健なブルジョアジーの勢力たる改進黨に支持さ
れたのだという考え方が従来の通説なのだが、ミル
の思想の妥協的折衷的性格を強調するあまり、それが
ブルジョア自由主義のもつ進歩的性格の核心、すなわ
ち、反地主的な広い意味の勤労人民の立場だけは最後
まで堅持していたという事実をみおとすことは不当で
あらう。ミルがこの点でいかに潔癖であつたかは、彼
がカーライルやコントをあれほど高く買いつつ、彼
らの思想のうちでこの基本線に抵触する部分だけは断
乎として斥けている一事を以てしても明白である。こ
こに彼の思想がもつ本質的な健康さがみられようし、
わが国においても、思想言論に対する不当な圧迫との
斗争を鼓舞しうる力をなぐもちえた所以があるとい
つてよいであらう。

註(1) この第二巻以後は鈴木重孝が代つて翻譯し
ているが第四巻までで結局完訳を見なかつた。その翻
訳の底本が第何版かは不明であるが、第三版以後のも
のであることには間違いない。

(2) これには福沢諭吉の序文がある。福沢自身には
ミルの翻譯はないけれども、彼がいかにミルを広く読
み且つふかく攝取しているかは彼の多くの著書があき
らかにしめしている。

(3) もう一つ例をあげるなら、ミルが死去した一八
七三年(明治六年)五月に、ロンドンに留学していた
馬場辰猪が、朝野をあげてミルの死を哀悼したことを
親しく見聞してその学問の偉大さに打たれ、大きな感
化をうけた。このことについては、西田長壽「馬場辰
猪小伝」(『三田学会雑誌』昭和二十七年七月号)参照。

(4) 杉原「戦後のわが国におけるJ・S・ミル文献について」(『経済論集』第四卷第二号昭和二十九年五月刊)のむすびを参照。

三

明治の二十年代以降になるとドイツの思想の輸入がさかんになって、イギリス系のそれがあまり重視されなくなるのであるが、ミルに関する文献も明治の後半期には前期にくらべて激減している。のみならずミルのよまれ方も、英語の教科書として学習されるにせよ、各専門分野における古典として研究されるにせよ、従来のミルのうけ入れ方に見られたような実践とのおいさきしたつながりが失なわれてゆく。ただ前期にはほとんど顧みられなかつたミルの思想の一面がこの期にいたつてあたらしく問題とされるにいたつた。それはミルの社会主義論であつて、この点が注目されてくるのは、日本資本主義が、その後進性と急進性の故に、二十年代においてはやくも当面せざるをえなかつた社会問題という重要な課題との関連においてである。⁽¹⁾ミルの社会主義論がまとまつて展開されているのは、『経済学原理』第二篇分配論のはじめの二章および遺稿「社会主義論」(一八七九年・明治十二年発表)であるが、前者が明治の初年に訳出済みであることは二でのべたとおりである。この点について三宅雪嶺は『同時代史』の中でつぎのようにいう、「日本も英語にて世界の知識を吸収せる間、自由主義を主にし、社会主義に興味を感じず、ミルの経済学を通じ、幾許か之を彷彿せるのみ。其の経済学は盛んに行われ、一時経済学といえはミルに限りたるが、ミルは初版にて社会主義に反対し、次に稍々緩和し、更に強調の傾向を帯び、日本に入れるは強調の傾向あり(前節の註(1)を注意—杉原)、全部の者は多少動かさるるなきを得ず。但だ

読者は概ね普通に経済の題目とする所に注意し、社会主義の如きを軽々看過し去れり。されど社会主義が夢と考えられたる時、相当の論拠ありと思われたるは、ミルの媒介に依ること少からず」と。われわれは、この雪嶺の評言がかならずしも誤りではないことを、たとえば自由党左派の流れをくむ幸徳秋水の『社会主義神髓』(明治三十六年)におけるミルの社会主義論のとりあつかい方からも推定することができるであろう。⁽²⁾又後者は、明治三十四年、社会民主党の結成と即日禁止という事態に接して、島田三郎が発表した『社会主義概評』の中でとりあげられている。島田は、この著書によつて「社会主義の必ずしも危険に非ず、而して研鑽公評の要ある」(序)ことを主張するに際し、同様の論旨を展開したミルの「社会主義論」の一節を引用して「予輩は憚を正してミルの此言に聴かざる可からず」とのべている。⁽³⁾ミルが晩年にいたつて社会主義に関する一書を執筆するにいたつたのは、別の機会にくわしくのべたように、ウィクトリア中期の保守的支配層が、労働者階級の擡頭に直面して反動的な弾圧政策に走り、労働運動の一層の過激化をまねいてさらに極端な対立におこまれるという悪循環を生み出す愚をさけ、イギリス的良識によつて問題を解決させようとする警世的意図に出でるものであつたが、約三十年の後、同様の問題を同様の立場からとりあげた日本の一自由主義者によつて、この遺稿が明治の初年以來わが国の思想界にたしなまれてきたミルの權威をふまえたつ有効に利用されていることは、まことに興味ふかい。しかし、ミルを「合理主義の聖者」とよんで尊敬していたグラッドストーンほどの識見をそなえた政治家を生み出すべく、日本資本主義の構造的矛盾はあまりにもふかく、明治三十九年に桂内閣にかわつて成立

した西園寺内閣下の二年半の間はやや合理的な政策がおこなわれるかと思へたのも束の間、「赤旗事件」を契機としてふたたび桂反動内閣にかわり、弾圧の強化と労働運動の急進化との悪循環の結果、ついに「大逆事件」という悲劇がうみ出されるにいたることを、何人も阻止することができなかつたのだつた。

註(1) 石谷齊藏『社会党瑣聞』(明治二十四年)や民友社編『現時の社会主義』(同二十六年)には、すでにミルの社会主義論が紹介されているようであるが、原本未見である。

(2) 『同時代史』第四卷・岩波書店二〇—二頁

(3) 幸徳はここで、碩学スベンサーの如きすら「社会主義の制度は総て奴隷制度也」とのべていることを「謬誤にあらずんば即ち譏誣也」と斥け、ミルの「共產主義における検束は、多数人類に取つて現時の状態に比して明かに自由なる者あらん」という言葉(『経済学原理』末永訳(二二九頁))を引用している(『社会主義神髓』岩波文庫・四二・四九頁)

(4) 『社会主義概評』(明治三十四年) 一二四—五・一六六—七頁

(5) 杉原「J・S・ミルと社会主義」(『経済論集』関西大学創立七十周年記念特輯号) 参照。

四

三宅雪嶺はさきに引用した文章につづけて「ミルはオーエン、フーリエ、サン・シモンを知りてマルクスを知らず、之を知れば何と解したるべきか。恐らく之を好まず、自由を重んじつつ、貧慾を憎み、資本を制せんとするに於て渝らざらん」とのべている。ミルの社会主義観の特色を簡潔にいいえて妙であるが、この点は、大正期に入つて、とくに第一次世界大戦後、マルクシズムやギルド社会主義やサンディカリズムなど諸種の社会主義思想との対比において、多くの人々に

よつてとりあげられた。そのうちでも、河上肇博士が大正八年に『経済論叢』に発表された二論稿——「社会主義者としてのゼー・エス・ミル」・「ミルと労働問題」——は、この方面の研究に先鞭をつけたものとして、とくにマルクスの思想との対比という問題意識をもつたものとして、とりわけ重要であるが、これは大正十二年に公刊された博士の『資本主義経済学の史的発展』の第五章第三節ジェイ・エス・ミルの思想の中に包括されている。ところでわれわれは、同じ十二年に、『経済学論集』に発表され、同年『社会思想史研究』に第四篇として収録された河合栄治郎氏の「過渡的思想家としてのジョン・ステュアート・ミル」というこれ亦注目すべき論文をもつていたのであるが、たまたまミル歿後五十年にあたるこの年に、それぞれミル研究を最終章とする二つのユニークな経済思想史的研究がうまれたことは、わが国のアカデミズムが、包括的なミルの思想を、全体系的にとりあげようとすると、過渡期の思想家としての特質を思想史の上に位置づけることによつて浮彫する——もつともその位置づけ方は、河上博士の場合はスミスからマルクスへの中間に、河合氏の場合はスミスからグリーンへの中間にミルをおく、というように、著者自身の思想的立場によつてことなつてゐるのだが——ことができるほどの学問的能力をそなえるにいたつたことの表現であると同時に、その後のミル研究に貴重な礎石をおいたものであるということができるのである。⁽²⁾

あたかもその頃、民権運動以来の活潑さをみせた民主化運動に刺激されてか、ミルの思想に対する一般の関心もたかまり、学術的な研究の外に、ミルの著書の翻訳が相ついで刊行された。とくに『婦人解放論』の邦訳が大正末期の数年間に単行本だけで三種もでたこ

とは、明治初期における『代議政体論』の邦訳の頻出が思い合はれて興味ふかい。だが昭和期に入つて国家統制の程度がふたたび強化されるにともない、理論的な研究には二教授の遺産をうけつゞ注目すべき成果が戦時になつてもなお見られはするものの、一般的には二教授を教壇から追放してしまふような重くらしい雰囲気の中で、ミルに対する実践的関心は急速におとろえてゆき、それがふたたびよみがえるのは、第二次世界大戦の終末をまたなければならなかつたのである。

註(1) これは昭和三年『経済学大綱』刊行の際その下篇として加筆の上収録された。そこでミルとマルクスとの対比はヨリ明確にされているが、博士のミル研究については、それへのするどい批判をふくむ籀田民藏氏の二論稿——「ゼ・エス・ミルの社会思想」(『国家学会雑誌』大正八年八月号)「社会主義は闇に面するか光に面するか」(『改造』大正十三年七月号)が参照されるべきである。

(2) 大正十二年は同時にアダム・スミス生誕二百年にもあたつていて、わが国のスミス研究は、その前後に非常に盛んとなり、その頃開始された本格的なマルクス研究と呼応しつつ、古典派経済学の科学的研究が強力におしすすめられた——この点については杉原「わが国におけるスミス研究史に関する覚え書」(『経済論集』オ六卷四号) 参照——が、ミルの経済学に対する正当な理解も、これによつてはじめて軌道にのつたといつてよい。

五

戦後のわが国の民主的諸改革の過程の中で、両体制の国際的な対立を背景として、ミルに対する一般の関心が三たびたかまり、その中から理論的乃至啓蒙的なおびただしいミル関係の邦文文献が生産された。一

昨年わたくしは、それらを整理・紹介した論稿のむすびで、「ミル生誕百五十年に相当する明後年頃には、それによつてマルクス研究やスミス研究やリカード研究も同時に多大の裨益をあたえられるような本格的なミル研究の出現を、この国に期待してもよいのではないであらうか」とのべた(本稿第二節の註(4)参照)のだが、経済学史学会は、今秋の全国大会にあつて、ミル記念の行事をおこなう筈であるし、われわれ関西大学経済学会も亦、本誌の前号に報告されたように、去る五月十九日にささやかなミル記念会をもち、さらに今秋には、『経済論集』のミル特輯号にその研究成果を発表する予定である。それらの準備のために、最近ミルの諸著作にたししみ、とくに『自伝』をよみかえした私は、その際、ミルの広大な学識と誠実な人格にふかくうたれるとともに、ミル研究の現代的意義を、最近の国際的政治情勢の新しい展開を思い合せつつ、あらためて痛感した次第である。

後記 文中にかかげたミルの銅像の写真は、昨年三月ロンドン留学中の高木教授が撮影して、私におくられたものである。教授の解説を附して拙文をかざらせていただいた

ことに對し
教授に深甚
の謝意を表
したい。

(一九五六

・六・一二)

(教授、經

済学部)

昭和三十一年六月三十日発行

關西大學學報 第二九二號

大阪府大淀区長柄中通三丁目二番地

編集兼 久 井 忠 雄

大坂市北區川崎町三八

印刷所 株式会社 ナニワ印刷所

電話(35)七二七〇番

發行所 關西大學學報局

大阪府大淀区長柄中通三丁目
電話(35)七二七〇番
電話(35)七二七〇番
振替 大阪二六七二番

学内報

臨時評議員会

学校法人関西大学寄附行為第十九条第三項前段に基いて、六月二十一日(木)午後三時より天六学舎において臨時評議員会を開催。寄附行為第十四条第四号による評議員の選出に関する件並びに財産得喪に関する件(千里山敷地に於ける第二運動場新設のために他人所有地と本学所有地の一部との交換)につき審議し、これを可決した。

出席者 (イロハ順、敬称略)

中務平吉 榎本信雄 岩崎卯一 岩本公夫 今西庄次郎 池田信之助 春原源太郎 西尾尊太郎 西村治三郎 西本寛一 戸根泰雄 大小島寅二 大島武夫 桂忠雄 神宅賀壽恵 神屋敷民藏 寒川喜一 武田藏之助 竹沢喜代治 内藤正剛 中谷敬壽 長柄金吾 浪江源治 村尾静明 宇佐美正祐 矢野文雄 矢口家治 保井剛一 松葉徳三郎 政井武 江里口春志 阿部甚吉 明石三郎 澤村榮治 木原繁実 木村健助 水谷揆一 宮島綱男 三島律夫 白川朋吉 下条小野右衛門 平井三朗 久井忠雄 森川太郎 角田好太郎 岡師親徳

関西大学教育会館建設地鎮祭

教育後援会に於て予て計画中の教育会館建設の敷地も外苑内音楽堂の上に決定したので、五月二十九日(火)の吉日を卜

し、午前十時より泉蔵神社神官にて古式に則り厳かに地鎮祭を執行、近く着工の運びとなった。

桜田教授帰学

在外学術研究員として昨年四月渡欧した法学部桜田誉教授は、イギリス、アメリカ等の大学で研究、去る六月十一日羽



大阪駅頭の桜田教授

田空港着、同十三日午後五時大阪駅着「つばめ」号で無事帰学した。

安田教授帰学

在外学術研究員として昨年三月渡米した商学部安田信一教授は、ハーヴァード大学で研究後、イギリスその他西欧諸国の大学を訪れ、去る六月十五日神戸港着日本郵船有馬丸で海路無事帰国した。



帰朝の安田教授(神戸埠頭にて)

学会出張

- ◇ 法学部木村健助教授は四月二十八日より五月三日まで明治大学における日本比較法学会に出席。
- ◇ 法学部池田榮教授、原英二専任講師は四月二十九日より五月二日まで成蹊大学における日本政治学会に出席。
- ◇ 法学部明石三郎教授は四月二十九日より五月三日まで法政大学における日本私法学会、明治大学における日本比較法学会に出席。
- ◇ 法学部岩本慧助教授は私法学会、海法学会に出席。
- ◇ 法学部植田重正教授は四月三十日より五月三日まで早稲田大学における日本刑法学会に出席。

海外の大学より

(出版部)

アメリカ国会図書館より

図書寄贈

本学と学術図書及び定期刊行物の交換を行つてゐるアメリカ国会図書館(The Library of Congress)より、近く左記図書が寄贈される。

Bibliographical Procedures and Style

Chinese Scientific and Technical Serial Publications in the Collections of the Library of Congress.

Current National Bibliographies. Introduction to Asia.

カリフォルニア大学より

図書寄贈

カリフォルニア大学よりも、この程左記の図書が寄贈された。

Hans M. Wolff: Goethes Novelle "Die Wahlverwandtschaften".

(University of California Publications in Modern Philology, Volume 43)

R. A. Nicholls: Nietzsche in the Early Work of Thomas Mann. (University of California Publications in Modern Philology, Volume 45)

四月十四日（土曜）学友会執行部主催による新入生歓迎会が第一学舎二〇六教室で多数の新入生を迎えて開催された。

プログラムの経済学部高木秀次教授の「大学の使命」、文学部横田健一教授の「本学創立の事情と伝統の発展」と題する講演のほか、放談劇、吹奏楽、軽音楽、弁論、グリークラブ、映画・各部の紹介等があり、新入生に本学の研究活動や学生クラブ活動の全貌を知らせることが出来た。

本年三月、チーム主軸の殆んどが卒業し、その上在学中の有力メンバーがプロ



にスカウトされ、今春リーグ戦での活躍が危やぶまれたが、一勝一引分一敗の後、漸く立命を降し、上位四校の関・関・同・立の勝者で優勝が争われることになり、今後の慎重な試合運びが望まれている。

[illegible]

5月8日		5月7日		5月6日		5月5日	
関大	立命	関大	立命	関大	立命	関大	立命
000	103	000	000	000	101	000	043
000	関大	000	1立命	003	6関大	000	3立命
000		000		000		000	
000		000		000		000	100
001		000		001		000	000
020		000		200	002	000	300
200		000		000	於日生	003	000
A		000		6			4
3	1						
		10	0				
		10	0				

関西学生ホッケー春季リーグ戦は五月六日、西宮球技場でリーグ最終戦が行われたが、本学はチーム主軸の大量卒業の

痛手を充分恢復することが出来ず、長年
関西に又全日本に覇を唱えた当部は関学
に3—2で敗れ十六連勝を惜しくも逸し
た。

リーグ戦順位は次の通りである。

(1)関学9勝、(2)関大8勝1敗、(3)大市大7勝2敗、(4)天理大6勝3敗、(5)甲南大4勝4敗1分、(6)和歌大3勝5敗1分、(7)阪大2勝6敗1分、(8)京大2勝6敗1分、(9)立命1勝7敗1分、(10)神大0勝8敗1分、

西日本米蹴選手権第一日、戦前より期待の一戦であつたが、全神戸の巧みな試合運びに破れた。

全神戸
12
0 0 6 6
| | | |
0 0 0 0
0
関
大

五月六日、東西大学對抗競技対法大戦が、神宮競技場で行われ、本学はこれに勝ち、今迄の対戦成績は4勝1敗となつた。

関
大
19
0 0 13 6
| | | |
13 0 0 0
13
法
大

第六回関・関アイスホッケー定期戦は四月三十日、難波リンクで行われ、関学を破つた。

関
大
5
1 2 2
| | |
1 2 0
3
関
学

四月二十八、二十九兩日、瀬戸内に面した高砂中学校講堂で演奏旅行を行った。直ぐ中学生を対象に、ステージに立つたが、この学校には、秀れたハーモニカバンドがあり音楽鑑賞態度がよいので一同心から嬉んだ。午後は一般を対象に演奏会を催した。

映研では六月二日（主）午後五時より中之島中央公会堂にて「講演と映画の夕」を開催する。

講演 朝日新聞社学芸部 烏海 一郎氏
映画 松竹「野菊の如き君なりき」

MGM「重役室」

なお、同部では今夏の休暇を利用して、十六ミリ文化映画を製作する計画をたっている。

第二九〇号校友欄に於いて「詳久会春季総会」として掲載いたしました写真には「神戸関大倶楽部主催丹羽、星野両氏歓迎祝賀会」の誤りでしたので訂正します



校友 バツチ

校 友

燎原会春季總會

関西大学第二商業学校出身者で法曹界に籍を有するもので組織されている燎原会では、去る三月三十日午後五時より鳴尾町鯨料理「柳屋」で第四期の福地壽三氏（神戸地方明石支部裁判官）の大阪地方判事派遣歓迎会及塩見利夫氏の大阪弁護士会副会長当選祝賀会を兼ねて春季總會を開催。十三名の参加者を得て盛會裡に午後十時終了。



燎原会春季總會

出席者
来賓 長柄金吾（関大校友会副会長）
会員側

福地壽三 岡田退一 塩見利三 中本照規 倉橋春雄 河内兼三 岡久根幸吉 河村秀信 田村徳夫 大井孝 伊藤秀一 今井勝

大阪市役所関大校友支部発会總會

四月十一日午後五時堂ビル清交社で大阪市役所支部の発会式を挙行、校友四十五名（うち市議五名）出席。新役員を左記の通り決定、式終了後來賓として岩崎學長、白川理事長、久井専務理事、神宅公安委員が出席。和やかに懇談会を開き午後八時盛會裡に終った。
向支部では引続き各局、区役所毎に幹事を中心として懇談会を開催し校友の調査を行う予定である。

支部長 村上精三
副支部長 中辻淳

幹事
富本忠夫 百武通雄 大西信之 森本重道 横山三郎 吉岡賢五郎 瀬戸愛吉 谷田裕 三木芳男 玉井肇 太田一郎 西井文雄 吉川裕 久保田健一 安橋貞雄 岡島喜代治 沢義夫 山本栄夫 大久保博 戴本武秀 喜多房三 植西雄雄 工藤源次郎 浅井富次 荒堀茂 下村則喜 西田政道 岡田輝夫 中村泰吉 木村和 村上正雄 島田信一 松本文勝 日高菊夫 長尾豊次郎 田中義一 寺西武

十三会春季例会

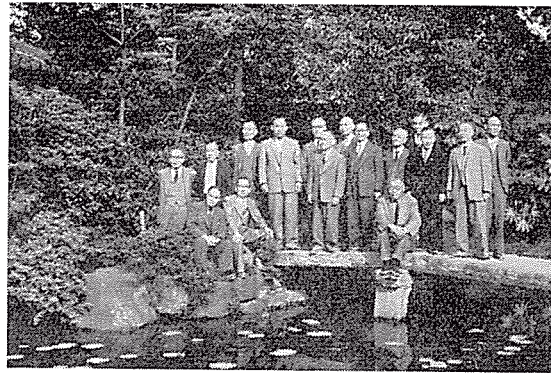
五月二、三日のゴールデンウィークの休日を利用し、枚岡梅林の梅屋敷に於て一泊二日の例会を開催。俗塵を離れ自然の素晴らしい風景に目を楽しませながら盛會裡に幕を閉じた。

出席者
浜田八達 井上巧 佐藤孝好 江口透 久田一栄 中谷政男 竹林直信 中山幸市 畑孝二郎 玉置転留男 名倉照蔵 頼戸男

六念会同期物故者追悼法要

卒業以來四十年を迎えた大正六年出身者の集う六念会は、約十五名の物故せられた同期生の追悼法要を兼ねて五月十二日四天王寺本坊に於て例会を開催。

物故者氏名
桜井政次郎 橋口勉夫 一井孝次 小野村風敏 野口政治郎 北浦圭太郎 湯川喜七 住岡時三郎 倉橋徳太郎 倉貫宣 徳原義三 花田菊太郎 波多野勝武 本位田勝三 元木道春



六念会同期物故者追悼法要

出席者
秋山治土 宮崎秀夫 大月伸 山根通蔵 山口定亮 中村忠夫 桂忠雄 小原晃彦 竹西宗助 柏原好郎 上坂卯之助 馬場弘道 松崎友一 長沢盛一 横田長次郎 田中肇

神戸関大俱樂部定時總會

今春学窓を巣立つた新会員を迎え、三十一年度定時總會を五月十二日午後三時

神戸商工会議所に於て開催。

向井常務理事の司会で進められ、先づ山崎俱樂部理事長の挨拶後、岩崎學長挨拶、久井専務理事の挨拶があり、続いて最近欧米視察留学より帰国した文学部の上道教授の講演を聴き、暫時小憩の間に玄關のボーテで一同記念撮影を行った。その後会計報告並に役員改選に移り一応議事終了後関大グリークラブの合唱、映画の上映などに満場はしばし嘆息のどよめきを察し得なかつた。

最後に関大グリークラブのリードで学歌高唱、万才三唱の後、午後六時半閉会。



神戸関大クラブ總會

出席者（順不同・敬称略）
母校側 岩崎學長 久井専務理事 上道教授 俱樂部側
山崎敬義 水本信夫 向井裕亮 角田好太郎 難波方 片山菊治郎 今岡琢磨 喜多孝治 赤柳正夫 杉村守清 岸生龍三 寺本広吉 青木守山

根基弘 久保正信 野生義一 小川立朝 森又雄
中野正喜 淵崎邦郎 河合義雄 渡辺道男 橋本
太一 田中剛 榎本昭 井井国雄 池田明 橋本
龍男 水本千代松 安福集 木下正一 長田隆造
山本光吉 飯沼健二 楠包純 木村功 多賀恒
一 藤田明 大野幸雄 石上倫 貴客喜作 中藤
幸太郎 平島弘 野田俊春 赤井定雄 岡田芳太
郎 柴田晃也 土持勇三 八代豊 堤熊治 才津
克巳 佐々木高明 菊地圭一 真屋夏生 垣花常
信 青山政雄 中村武巳 香川直行 木下照夫
三佐藤岩夫 小林正一 山本鎮郎 猪沢傳夫 小
倉武志 前田豊 三枝三郎 岩井代三 中川洋一
中手一郎 井手原武彦 梶浦秋治

神戸関大倶楽部主催

安長神戸地方法務局長歓送会

今般法務省の人事移動により神戸地方
法務局長安長義美氏が大阪地方法務局に
栄転を機に五月十二日午後七時より昭和
三十一年度定時総会終了後、北京樓に於
て上道教授をはじめ二十七名を迎え盛大
に開催。



安長氏 歓送会

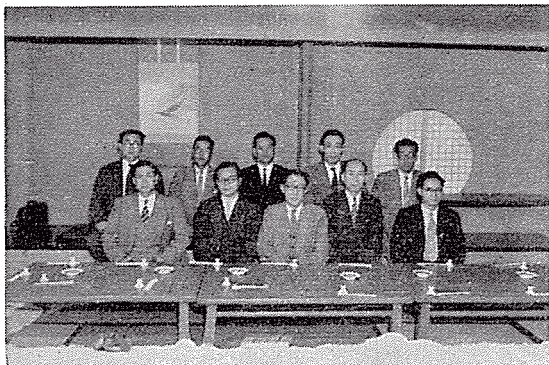
出席者 (敬称略 順序不同)
来賓側
安長義美 上道教授
山崎敬義 水本信夫 向井裕亮 難波方 片山菊
山崎敬義 水本信夫 向井裕亮 難波方 片山菊

治郎 橋本太一 水本千代松 森又雄 下条小野
右衛門 中藤幸太郎 赤井定雄 貴客喜作 岡本
徳 山本鎮郎 榎本昭 飯沼健二 角田好太郎
赤沢正夫 小川立朝 今岡琢郎 河合義雄 西村
隆 木下正一 野田俊春 岡田芳太郎 才津克巳
村上壮一

双龍会總會

昭和三十一年五月十八日(金)午後六時
大阪南、喜楽別館に於て春季総会を開
催。雨の為出席会員は予想外に僅かで
あつたが、来賓の矢口孝次郎教授、里見
復二調査課長を中心に在学当時の思い出
と近況に談笑。学歌高唱の後閉会。

出席者
出賓者
矢口孝次郎教授
里見復二調査課長
森元一 弓場晴男 山平棋津男 波田野福
夫 坂部正武 井上隆 藤塚嘉治 坂本龍



双龍会 總會

東京支部役員会

五月二十六日(土)午後一時より太平ビ
ル三階に於て新役員の顔合せを兼ね、来
るべき秋季総会の開催時期、方法に付打
合せの為役員会を開催した。
種々忌憚のない意見が出て今後の会運営
に大いに利するところがあつた。

出席者
相談役 田辺明四郎 植田八郎 丸物彰 梅田茂
畑孝二
支部長 中山幸市
副支部長 香西政一 田中寿蔵 甲斐亀夫(新任)
幹事 伊賀上嘉雄 河合治 山口栄治郎 中村簡
吉 荻野勉 筒井淳造 弓削多義郎 小林
稔 森本定雄 木原憲爾 秋元東洋男 安
田義哲 星野曾代治 吉田有宏 村上誠一
三枝芳郎 寒川英布 伊藤孝行

大阪支部春季總會

六月三日(日)新緑の大和
路を電田、法隆寺、信貴山
と観光バスにゆられながら
日頃の激務を忘れ、娯楽と
団欒の一日を共に過すプ
ラシタをたてた同支部では、夜
来の雨にもかかわらず岩崎
学長の一番乗りに続いて遠
方からも続々と参集、十時
過ぎ発車、雨にて一層緑を
増した大和街道を電田をへ
て法隆寺に駐車約一時間、
千三百年の歴史を誇る古刹
国宝を拝観。ついでバスを
王子駅前ですて信貴電ケ

昭和
31年

校友名簿

近々発行 待望の名簿

— 収載人員二六、〇〇〇余名 —
終戦後二冊目の待望の校友名簿が六月末発
行の予定で印刷組版進行中でありま
す。御入用の方は代金をそえて早急にお申込み
下さい。
なほ名簿の正確を期するため、校了までの
異動はつとめ訂正したいと思ひます。その
で、知友諸兄の住所・職業の異動はお手数
ながら至急ご連絡のほどお願いいたしま
す。

申込先 關西大学 校友課
大阪市大淀区長柄中通二丁目
振替 大阪 五五五九四番

B5判 六〇〇頁
実費頒価五〇〇円
(送料当方負担)

出席者
大學側 岩崎学長
會員側
梅原貞治郎 海野円城 大石雄一郎 大月伸 鎌
田嘉之 樫本信雄 神屋敷民蔵 神吉等 北原元
茂 木村賢造 小寺小市郎 坂本竜夫 下条小野
右衛門 芝田精二 渡川鶴蔵 関豊馬 段林作太
郎 寺西武 戸根泰雄 中谷政男 長柄金吾 中
務平吉 内藤正剛 永田規矩夫 西本寛一 前田
常好 前田軍治 松本芳太郎 丸山喜三造 南清
三木基太郎 南弘雄 安富敬作 山崎敬義 八木
万太郎 大和英雄 吉村植蔵 和田伝三 和田豊二

關西大學 經濟論集

創立七十周年記念特輯

二九〇頁・かがり巻表紙
頒価 金三百五十円

内 容	著者
労働の生産性測定の基本問題	高木 秀玄
人口論対象一方法論序説	市原 亮平
ロビンソンの労働需要論	三谷 友吉
一雇用理論の学史的研究所一	澤村 榮治
一教育経済学研究の一齣一	杉原 四郎
J・S・ミルと社会主義	終戦十一年の日本経済政策の動向
遺稿「社会主義論」研究序説	日本造船業の成立と構造
本邦古代票作考	港灣と工業
一特にその由来一	大阪港の復興計画を中心として

關西大學 商學論集

創立七十周年記念特輯

二七六頁・かがり巻表紙
頒価 金三百五十円

内 容	著者
英國の小売商	山崎 紀男
海上貿易におけるF・O・B	賀屋 俊雄
一白耳國國アソシエーションに於ける慣習を	
中心として一	
株式の価値と價格の關係	今西 庄次郎
觀光經濟學の基礎概念	河村 宣介
会社經營の合理化と会社制度	板橋 菊松
一株式會社を對象とした經濟法的考察一	
經營參加と勞働協力	鯨江 城夫
「販賣主義」の理論的根拠について	植野 郁太

關西大學 文學論集

創立七十周年記念特輯

七二〇頁・かがり巻表紙
頒価 金七百円

内 容	著者
Community 及 Communication について	井上 吉次郎
サルトル哲學の出発点について	岡野 留次郎
ハイデッガーに於ける「無」について	大小 島真二
倫理現象と政治現象 人間學的研究	田中 照
史 学	
ヘーゲルとその時代	秋山 博愛
近世城下の成立	魚澄 惣五郎
占地による前方後圓墳の形式分類	末永 雅雄
猿の心臓	高橋 盛孝
サラセン帝國の駅遞局長について	藤本 勝次
武蔵時代に於けるロミンテルンの中共指導	三上 諦聰
藤原鎌足伝研究序説	横田 健一
文 学	
「玄秘集」の註釈書について	飯田 正一
「あはれむをむ」	澤瀉 久孝
「昨日今日の物語」と「醒睡笑」	金子 又兵衛
已然形にの添うた形について	吉永 登
E・M・フォースター	大西 昭男
一その沈黙一	
Evelyn Waugh の初期小説	小野 勇
一特にその「戦いた文学」としての性格について一	

物語作家クラブ	進藤 浩二郎
「ハムレット」の第一独白	玉木 意志太
（二幕場）「二九一五行」	
英國小説における假構について	角田 文雄
聖書の Jackel について	廣瀬 捨三
J・S・エリオットの「四つの四重奏曲」の標題について	堀 正人
D・H・ロレンスの自叙伝	山本 榮一郎
アーサー伝説發展の概要	三木 治
アーダルベルト・シュニツァーの宿命	見次 直雄
國際語と自然科学術語	橋田 慶蔵
史 学	
蒙古文讀法目録	石浜 純太郎
一蒙古文特殊語目録一	
文 学	
D・H・Lawrence の作品に用いられた英國中部地方言の人名代名詞について	廣岡 英雄
ジョン・キーツの詩に於ける彼の色調	星野 信夫
《Pantagruel》のヴァリアントにあつた十六世紀フランス語	小方 厚彦
Schiller ドイツ語の史的考察	福本 喜之助
自然科学	
精密インベスメント鑄造法	入江 深
整數の關係	河村 信一

關西大學出版部

大阪府大阪市長柄中丁二丁目

發售所

關西大學

發行所

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十一年六月三十日發行（毎月一回三十日發行）

關西大學學報 第二九二號 六月號